

特集／小磯良平画伯を語る（上）座談会

故小磯良平画伯を偲んで 軽やかに 莊重に 永遠に

□出席者

金井元彦（県立近代美術館館長）

石阪春生（洋画家）

野呂好徳（梅田画廊社長）

嘉納邦子（小磯良平画伯次女）

思い出を語るには、気品高く清雅で語り尽くせない。

昨年十二月十六日小磯良平画伯が逝去され、早や一年が経とうとしている。シヤイだったが凛として、貫き通したモダンズム、偉大な「絵の虫」。三カ月の闘病の後、静かに隠やかに天国へと旅立った。淡々とした中にも、暖かい人柄で人々の心を魅了していた小磯画伯。

この度、小磯良平記念館が設立されるに当り、画伯のアトリエが記念館へ移築されることになった。一周年を記念して、画伯ゆかりの方々にはゆかりの場所、御影のアトリエで想い出を語っていただいた。

★大物は、のん気な時代

——同級生の画伯はいかがでした。

金井 小磯さんとは神戸二中の同級生です。私は大開小学校ですが、実は高等小学校から一緒なのです。私は野球に夢中になっていて「あつ」と気付いたら二中の入試に落ちてしまってたんですよ。小磯君も絵に夢中でその口でしょうね。竹中（郁）君も、皆二中の同い歳組なんです。高等小学校は落第組が二組もありましたね。嘉納 昔はのん気な時代だったのではありませんか。

野呂 それが皆そろって、後には知事さん、画家に詩人ですから（笑）大器晩成ですね。

石阪 私は大学を出てから絵を描き出しましてね。小磯先生の絵が好きであこがれていたのですが、伯父の竹中



北野町のアトリエにて。昭和13年頃、一家揃って。後ろの絵画は戦火にて焼失。



野呂 好徳氏



嘉納 邦子さん



石阪 春生氏



金井 元彦氏

郁はちっとも会わせてくれなかった。きっとこんな下手なのは連れて行けないと思っていたのでしょう。いつも家へ遊びに来ては僕の絵見て「下手やなあ」と言っていましたからね。それが三十四年して僕が30歳前の時突然「小磯の所へ連れて行ってやる」と言われ、あまり急なので手ぶらで来てしまった。それで先生に「あんた絵を描くの」「はい。好きなんです。恋焦がれていたのにそんな愛想のない初対面でした。野呂さんの出会いはどうでしたか。

野呂 私は学生時代梅田画廊へアルバイトで行っていた時、昭和29年19歳でした。車の免許を取って父をこのアトリエへ送って来ると、先生がローライコールの写真機で写して下さったのが初めてです。あの頃先生は写真に凝っていらして、随分とお嬢さん達も被写体とされたようです。

嘉納 そう、小さい頃、終戦までですかよく写してもらいました。絵の題材にされた時期もありますが、あれは終戦後塩屋のアトリエも焼け、モデルも居ないし、仕方ないから娘でも描こうか（笑）

野呂 私の父は三人居ると思っていました。実の父と梅田画廊の家の父、そして小磯先生。それほどかわいがっていただきましたね。画家と画商の枠をこえてです。お子さんとしての小磯先生はどんな方でしたか。

嘉納 父とは、私がフランスや東京へ行ったり結婚で、15年間離れて暮らしました。その間が一番充実して仕事をしていた時期に当たり、知らない作品がいっぱいありますね。

野呂 迎賓館の壁画も丁度その頃でしたね。その前に一時期マンションへ移されましたが――。

嘉納 父が60過ぎてからでした。両親二人だけで、それも父は東京へよく出かけていましたので、不用心だから移ったのです。

石阪 マンションライフも結構楽しめましたね。だから、あのフラットなバックが生まれたのは、マンシ

ヨンという近代空間の影響でしょうかね。人形を描かれたのもそこでですね。

★汽車、船、ゴルフ。

——先生は凝り性でしたね。

嘉納 洋弓をしたり、船、帆船を作ったり、汽車も凝りましてね、逗子の家では八畳間いっぱいレールを敷いて、駅や踏切を作って走らせてましたね。それはもう孫にも絶対触わせなかったですよ。

野呂 僕もよく部品を買いにやらされましたよ。高価なものは家内に内緒だとおっしゃってました(笑)。

石阪 それから写真ですね。写すのも写されるのも好きでした。ね。回りからよく写されるようになってから御自分で撮るのも少なくなったのでしょうかね。

野呂 スポーツもお好きで、野球は巨人、相撲は千代の富士。昭和天皇と同じでTVに釘付けでしたね。

石阪 先生があんまり汽車に夢中だから外に出るスポーツをと竹中がゴルフを勧めたと聞いています。

金井 ゴルフはよく一緒に行きましたよ。中学の同級生白川君達10人位でバスやハイヤーで木曽駒まで一泊で行ったものです。

石阪 好きでしたね。金井先生は計ったようにキチツとしたゴルフをなさる。

金井 小磯君はよく飛ばした。ティーショットが飛ばないと機嫌が悪い。

石阪 三度に一度くらいドカーン。竹中はあれを「大砲」と言っていました。反対に竹中のは箒で掃除してするように忙しいゴルフでしたね(笑)。

嘉納 父はスコア表も全部貯めてましたし、ティーもちゃんと置いていましたよ。絵に関しては描いた作品の整理もしないくせに(笑)本もよく買っていましたね。人に教わるのがいやなのか、本や雑誌で勉強していました。好きで楽しかったのか、ゴルフの前日は小学生の遠足のように枕元へ道具を揃えて寝ていましたよ。

石阪 僕もよく御一緒にしましたが、バットを外すと「めちゃめちゃデッサン狂ってるよ」(笑)、絵の批評はあまりなさらないのにゴルフではよくおっしゃった。

野呂 ゴルフの帰りにお人形事件がありましたね。

石阪 そう。野呂さんが御一緒に帰り道突然先生が「石阪君の所へ寄るわ」とおっしゃる。訳が解らずお茶でもと、「野呂君、これあの人形、車に積んで」さりげなく僕が大事にしていた人形を二つを持って帰られました(笑)野呂 その替りに「石阪君にはこれがいいだろう」と言っ、御自分の余っている人形を渡された(笑)先生の「これ」と思う目は鋭いですね。石阪先生が描かれている人形はどんなだろうと、ずっと考えてましたのでしうね。

石阪 それ以来僕はその人形を描けなくなりました(笑)人形は返していただきましたが、レースもタフタも完璧に描かれてしまっ、その後もう描いたって仕方ないでしょう。先生は描きたいモチーフに対しては、大変な興味を持たれる方ですね。

★巨匠は黙して語らず

——先程、作品の批評はなさらなかったとおっしゃいましたが。

野呂 それだけでなく無口な方でした。

金井 中学の時からあまりしゃべらなかつたですね。

——しゃべらないというと、松本宏さんが先生とお会いした時、このアトリエに向き合って座って黙ったまま一時間。あんなに困ったことはなかったというのは有名な話ですね(笑)。

野呂 いやいや、先生も「松本君はものを言わない人だねえ。あの時は困った」とおっしゃってましたよ(爆笑)。

金井 昭和五十八年に文化勲章を受章された時、梅田画廊主催の披露パーティがロイヤルホテルでありました。壇上でおもむろに紙を取り出すので、皆固唾を飲んで聞き入ると「皆様の御好意を有難くお受けいたします」だ

け(笑)

嘉納 そうなんです。いつも何か言ってやろうと考えていたのでしょうけど、言葉は少なかったですね。

石坂 作品はよく見て下さいましたが、5分程ジーンと見て黙ってる。しばらくして歩き出してフト「あの手、長いなあ。まああんたやからいいのかなー」(笑)、ある時思い切って「どうでしょう」と尋ねると「このモデルはこんな体つきか」と描く技法ではなく、モデルについて聞いてこられるのですよ(笑)

野呂 技術的な事については全くおっしゃらなかったですね。

石坂 当初、僕は新制作協会に出展したいと大作大作をアトリエに持って来たのです。先生の前に作品を広げると、「この作品は、他の会に出してみたら」(笑)ガッカリしてスゴスゴと帰りました。でも「時々、絵描いたら持っていっちゃい」と言っておきながら、それからですね。よく見て下さった。さっきも言いましたが黙ってジーンと。でもよく見て下さるので嬉しかったです。

嘉納 晩年、展覧会へ一緒に行っても黙って見てるだけ。皆さんついて回っていらっしゃるし、作者に何か一言でも言っておいたら、と言うと「ウーン」って言うだけ。

石坂 少しして、こっそりと新制作関西展に出したんです。会場へ行くと、先生は札が貼ってある僕の絵の前にしばしたらずみ「あれ、あんたの絵か」と一言だけ(笑)嘉納 普段は考えることは解りましたが、展覧会とかは何を考えているのだから、さっぱり解りませんでしたね。県的美術館の50周年の時にズラッと自分の絵を並べていただいても、黙っているし、いったい何を考えているのかしら、と思いましたわ。

★若き日の情熱、新制作協会

——ご自分では毎日描かれてましたね。

石坂 絵描きで描くことが好きなのは当然と言うべきで

しょうけど、もっと好き。楽しかったのでしょうね。

野呂 私もモデルを随分紹介しましたが、モデルが来るなら日曜日でも描いておられた。他にはデッサンをしたリエッチングをなさったり。

石坂 寸暇を惜しまず、でしたね。

野呂 とても丁寧な方でしたが、モデルに対しても丁寧で、気を使われてましたね。遠慮しながら洋服のヒダを直したり。しかし厳しい面もあって、途中モデルがコックリとしようなものなら、次の日からもう呼ばれませんでしたね。プロ意識を持ってもらわないと、ということでしょう。

石坂 先生のお気持ちはいつも前へ前へ、インタレストは次にどんな絵を描こうかということでしたね。

野呂 新制作に対して熱心でしたね。

石坂 僕達よくおられました。新制作の書類などはとても丁寧にしておられました。こだわりというのが、すごかったですね。我々が思っているよりも大変な事だったのじゃないでしょうか。若い時の情熱、二十歳代の頃じゃないですか、5、6人で造られて新制作というのがどうなるかも分からなかったでしょうし、小人数で終わってしまうかもしれない、それを日本の七大団体にまで育てられたのですから。最後には日本画の部門まで作り、最盛期へと盛り立てられた。

野呂 彫刻も一番でしょう。今が一番充実している時ですね。

石坂 あれは愛情と意気込みでしょうね。猪熊(弦一郎)先生も時々演説で言われますけれど、若い時作ったものがこれだけ盛大になったという事は、感慨無量だったのでしょう。また嬉しかったのでしょうね。伊藤雄郎先生が二科に入り、その頃に「小磯さんにこっち来いよ」と誘われて来たんだと言っておられました。小松先生は創立会員ではないですが、初期から出品の仲間として居られましたね。出品者として協力されていたようですね。

僕達が入った時はもうかなり大きな会でしたから、それ

までの大きくなっていくところで、計り知れない部分があるのでしようね。僕の初出品は小磯先生が50歳過ぎ頃で、20回位だったのじゃないでしょうか。あの会は、偉い方は何もおっしゃらないのですよ。小磯先生はもちろん真中に座って黙っていらっしやる。会長という制度が無いのですよ。

野呂 それはめずらしい。

石阪 小磯先生も誰もかも皆一票なのです。審査委員長という役割はあるのですが、それが先生に回って来て「先生どうですか」と聞いても何もおっしゃらない。

普段以上に無口(笑)

★不思議なコンビ、詩人・竹中郁と小磯良平画伯

——小磯先生が無口だから竹中先生と合ったのでしよう
石阪 竹中もよくしゃべりましたからねえ。まあ正反対の性格だったのでしょうか。

金井 仲良かったですね。端から見ると不思議な取り合わせでしたよ。

石阪 ゴルフも「大砲」みたいに飛ばすのと「箒で掃除」してのと(笑)食べ物好みは合ってたようですが、油濃いものが好きでしたね。竹中はベーストとか。

嘉納 父も西洋嗜好。フランス料理や中華料理、こってりしたものが好き。

石阪 しかし医者にかかるようになってからが違う。油物は良くないと言われると、竹中はブツツリと断ってしまった。医者の言うことには従順でしたね。自己主張が強いと言われていた割に素直でした。

嘉納 その点父は、今さらって言って。おとなしそうに見えて頑固だった。

野呂 頑固というかマイペースでしような。

石阪 しかし、横から見ているとこの二人どこが合うのかわあつて。



御影のアトリエ風景

野呂 不思議なコンビでしたね。

金井 でも、いいコンビでしたねえ。二人共お互いに得をしていましたね。全然違う感性を持って、本当に全然違うのですよね。

石阪 どっちも相手の感性にムカツいている所があって、知識についてもね。

嘉納 そうそう。

石阪 良い意味のライバルでしたね。感性の種類が違うのだと僕は思います。二人で話していてムカツとしているのですよね(笑)それでも仲が良い。

嘉納 本当にそうでしたね。

野呂 一年が過ぎてしまいました。

嘉納 私共では一周忌とは言わず、教会ではこの一年に亡くなった方々に、という永眠者記念式を11月5日にしていたきましたのよ。一年祭を記念して、又アトリエを神戸市の美術館に移築する前に、皆さんに来ていただくかと思つて。

石阪 ここ気に入っておられましたねえ。少しも変えることもせず、暖房は石炭しか使わない。このドア、絵によく登場しますが好きだったのでしょうか。色も先生がお決めたのでしょうか、なんとも淡いグリーンの色合い…。

野呂 いつもその椅子に座って、ちよつとうたた寝をされていたり…。

嘉納 お友達や絵の関係の方に父を偲んでいたどころと、好きだったモーツァルトをと考えて、テレマンアンサンブルにお願いしたら、是非演奏させて欲しいとおっしゃって、父のチェンバロを以前にもお世話になった松浦さんに調律をしていただいて…。12月16日のお昼と夜にと考えているのですよ。

野呂 それは良い。とても思い出になりますね。

(89年11月10日小磯画伯アトリエにて)

実験交流サロン

シアター・ポシェット

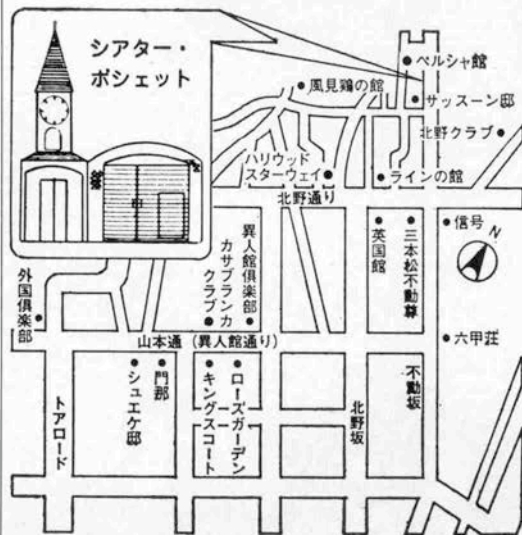
12月の公演

23日(土) 讃音会〜バイオリン演奏会〜

13:00〜(有料)

24日(日) サロンコンサート

14:00〜(有料)



★シアター利用のご案内

- 曜日、時間/土、日曜日(通常)AM10:00〜PM8:00
- 費用/ホール設備の使用無料。光熱、空調、管理費のみ実費
- 付帯設備/グランドピアノ・エレクトーン・録音、音響機器、ミキサー、照明コントローラー・テープレコーダー、マイク、映写機等
- お申し込み、お問い合わせ

そごう前センター街東南角、さんちか入口

〒650 神戸市中央区三宮町1丁目5-1 住友銀行ビル6F

佐本小児歯科 佐本進 ☎331-6302〜3



SAMOTO CLINIC

佐本
産科

ママといっしょに



赤ちゃん: 和仁 慧美ちゃん(平成元年6月22日生)

ママ: 隆子さん

「子供は仏の子、さずかりもの。『いのち』、たいせつなものです。大事に育てていきたいです。」

★佐本産科・婦人科★

佐本 学

神戸市兵庫区中道通4-1-15

☎575-1024(病室☎576-9639)

市バス上沢4停南スグ

特集／

故・小磯良平
画伯のこと
Ⅱ エッセイ



■随想／小磯先生を偲ぶ（1）

小磯画伯の婦人像

岩井健作

（日本キリスト教団神戸教会・牧師）

「小磯先生はどうして洗礼をお受けになったのですか」。会食も終って、テーブルスピーチもひと通り済んで、座がくつろいでいた時、ふとある青年が後の席から大きな声で尋ねた。貞枝夫人と並んで正面に座っていた寡黙な画伯がすつくと立ちあがった。教室で解答をする生徒のようなトーンで、「母のつよいすめによります。」と語り終え、ゆつくりと席につかれた。その光景は今でも心に残っている。「文化功労者」となられた折、それを祝して神戸教会の有志が、教会の階下講堂で小さな集いを持った時のことであった。

その母とは小磯英さんのことである。あの頃のキリスト教には、ピューリタンの信仰を、生活と倫理に一貫させ、子供たちが畏敬の念を抱かざるを得ないような、「母」の存在があったのであろう。いつだったか鶴見俊輔さんが、キリスト教といえば母との闘いですよ、という意味のことを言われていたのを思い出す。明治初

期の婦人宣教師のたがずまいの、日本の教会への影響は大きかったに違いない。大正期の自由なモダニズムの中で青年期を過した画伯にはさぞ煙たかったに違いない、と思う。

昨年の六月、小磯画伯の日曜学校友達の一入だった吉田信さん（神戸教会員、元NHK音楽部長・日本レコード大賞審査委員長）が亡くなられた。東京で葬儀を司った私が、帰神後、画伯を訪問



塩屋の海岸で。右が小磯画伯。

し、そのことをお知らせした。「吉田君の母、近（ちか）さんはしっかり者だった」と語られた。もう言葉がはつきりしないほどに弱られていて聴き取りにくかった。だが、そこには古えの婦人像の鮮明さがあった。いつものように短い祈りを捧げると「アーメン（然り）」を静かに唱和された。お別れして立ち上り、玄関で靴を履いていると、いつの間にか付添の方を支えにして（その日、ご息女邦子さんは外出でご不在だった）、そろりそろりと歩いてこられ、わざわざ私を見送って下さった。滋しみをたたえた端正なそのまなざしは、もうこの世にはない。

葬儀のあと、甲南斎場で柩の前で最後の祈りを捧げた時、無性に涙が溢れてとまらなかった。その昔、新制作展で、精緻な婦人像の前で、その気品に打たれていた少年の日の自分の姿が脳裏をよぎった。神戸という街など知るよしもなかった頃のことである。

■随想/小磯先生を偲ぶ(2)

一つの思い出

小松益喜
〈画家・新制作協会会員〉

小磯良平氏が逝かれて早くも一カ年になろうとしている。氏に対する遺惜・評価の言葉は、すでに数々の人から語られ、巨星随つた感じを繰り返し嘯みしめる思いである。私にとって、師とも仰ぎ友とも親んだ想い出の数々は、今も尚消えることなく胸中を去来しているが、何気なく見過して来た氏の一挙手一投足が、あらためて人間・小磯良平を語るものとして甦えて来る。

それは昭和十一、二年の頃か、私が神戸へ出て来て数年経った頃、生活苦に喘ぎながらも異人館に魅せられて、山本通りの小磯アトリエに日参していた頃のことである。アトリエには若き画家の卵、未来の大家を夢見る若者たちが毎日のように集まり、小磯氏の指導の下に、懸命に、楽しく勉強していたものだ。私もその中の一人だったというわけだが、その中にN君という、熱心に画を描くが



北野町・山本通のアトリエ。でモデルの邦子さんと嘉子さん
(小磯画伯撮影)

なかなか巧くならない男がいた。モデルT嬢を描いていた時、あまりにも素描が崩れているのを見た小磯氏は、これは尋常ではない、眼が悪いのではないか、と心配し、県立病院の眼科へ連れて行ったのである。協力を頼まれた私は喜んで彼のためにクルマを用意し、県立病院へまで同行し、特別診察券をとって有名博士の診察を乞うたものである。事情を知らないN君は、ただ小磯氏の言われるままに診察を受けたものの、キョトンとして出て来て、何の異状もない、と、不思議そうな面持だ。傍で私は、N君を傷つけまいとして何故病院へ来たかについて一言も言わなかった小磯氏の配慮を痛いほど感じて、頭の下がる思いだった。小磯氏三十歳代のささやかな思い出である。

N君はその後間もなく病気をされ、その時の小磯氏の暖い思いやりを知る由もなく他界してしまった。神ぞ知る！人間・小磯良平をかいま見る思い出の一齣である。

■随想／小磯先生を偲ぶ(3)

絵を描くのも命がけ

西村 元三朗
〈画家・新制作協会会員〉

あれは幻だったのだろうか……

昭和十七年、山本通りの静かなアトリエで先生は、彫の深いモデルさんの顔から衣装へ、黙々と鉛筆を走らせておられた。「ちよっと休もう」と先生が呟かれるとモデルさんのNさんは、2Bの鉛筆の先を切り出しナイフで削り整えられる。短い休憩中に先生は私の稚拙な木炭デッサンを覗かれて見事に皮肉の利いた批評をされる。

「先生お茶がはいりました」とNさんの声、そして私にも「ボクもお茶いだかない」と弟をいた



北野町アトリエの縁側で

わるような呼びかけ。緊張がほぐれる嬉しい一瞬であった。休憩中でも先生は寡黙、モデルさんも無口、駆け出しの私は話しかけられなければ声も出ない。再び仕事にかかられても、モデルさんのポーズに注文をつけられるだけ、ときたまの親しい来訪者の折の笑顔は仕事中には見られず、三人だけのアトリエは先生の筆の走る音だけが静寂を意識させる。

時は流れ太平洋戦争の泥沼化とともに先生のアトリエのバレーナの構図の背景になる金属のバーも取り外され消え去った。

著名な画家は拒否できない戦争記録画にも先生は殺伐な情景は描かれず、常に格調の高い沈静な図柄を表現された。人類にも動植物にも、先生の観

察には愛の裏打ちがあった。敗戦の直前、私は荷車に先生ご家族の最少限度の生活必需品と、わずかな画材と作品を載せて裏六甲の旧山田村へ運ぶことになった。その折、先生はアキレス腱を切られたあと、まだ歩き辛い足で、「ボクも後押しをするよ」と、私がお止めるのも聞かれず、山本通りから平野、そして鈴蘭台までの長い登り坂を、痛む足を引きずる様にして押し通された。その間ひとことも苦痛の言葉を出されなかった。「絵を描くのも命がけ」といつかの先生の言葉は私は終生忘れない。その闘魂と思ひやりは、私に知識や技術よりなお大切なものを学ばせていただいた。

空襲によって山本通りのアトリエと数々の作品は焼失した。その後の三度四度と移られた仮住まいの不自由な環境の中で、ご母堂・ご家族の面倒を見ながらの厳しい制作態度は愛をもって強く生きること、お手本を示して下さった。先生の心の足跡を想い乱世を強く強く生きたい。

■随想／小磯先生を偲ぶ(4)

心優しい信念の人

(姫路市立博物館・副館長)

伊藤 誠

小磯良平さんには、仕事がらみで何度もお目にかかっている。年月にして30数年。なのに一番初めにどんな風してお目にかかったか、はつきり思い出せないのである。ただ、それまで画集等で知っていた作品群から、恐らく作者はこんなお方であろうと想像していた人柄にピッタリであって、思わずうれしくなり感激したという強い印象だけは胸に残っている。

何度もお目にかかった中で、忘れられないことの1つは、昭和36年の初めごろのこと。2度目の長期渡欧(今回はアメリカも含めて)から帰られた直後、早速にお訪ねした時。実は、その少し以前から



塩屋の家の庭にて。“二人の少女”の頃

日本の美術界、特に洋画界は抽象・非具象系の全盛時代が始まっており、具象画の、しかも非常に格調高い世界を追求されていた小磯さんも、永年の親友である猪熊弦一郎、佐藤敬氏らまでが具象から抽象へ転向されてしまい、いささか途惑いの面持ちだったのである。思い切った渡欧米は、そのような自らの気持ちに決着をつける、かなり厳しい旅行であったようだ。

旅立たれる前に、少しそのようなお気持ちをおうかがっていたので、帰国されたと聞き早々に飛んで行った次第。小磯さんは、非常に晴れやかなお顔で、大略、次のよう

なことを話された。

「自分の目で確かめてきたんやから、収獲は大きい。圧倒的な絵画の抽象化には、実のところ予想以上の驚きを持った。しかし、半面十分に納得もいった。そして確認できたのは、抽象画が圧倒的やからという、新

しい具象画が無いのとは違う。外国でも大勢の画家が具象画と真剣に取り組んだ。それに、永い美術の歴史から見れば、抽象画はようやく緒についたばかりで、どこへ行きつくか、まだまだこれからのこと。多少歴史が古いとはいえ、具象画から行きついてしもうたわけやない。未だ道遠しや。まあ、僕は意地でも変わらんよ」
優しいお人柄ながら、信念は決して曲げられなかった。こんなこともあった。

私が美術記者から事業部長になつて、最初に手がけた外国美術展が「ムンク展」であったが、この開催に先だって、小磯さんに何か一言いただけませんか、と実は張り切ってお訪ねしたところ「伊藤君、悪いけど僕はムンクが好きやないね」——ただし、ガツンといかれた当方を労わるように「向こうへ行った時ムンクをようけ撮ってきてるから、観て行くか」やはり優しい方であった。思い出は次々といくらかも出てくるが、実は私は、小磯さんは今もあの御影のお宅でキャンパスに向かい、静かに筆を運んでおられるように思えて仕方がないのである。

経済ポケット ジャーナル



★東芝がインテリジェント ビル建設

㈱東芝は関西における研究、技術開発拠点として、最先端の情報処理機器や通信ネットワーク網を備えたインテリジェントビル（十

VANで結ぶほか、衛星通信を利用した複数事業間での多元TV会議や遠隔教育などが行える設備を備えている。来年四月着工、平成三年十月完成予定。

★太陽神戸三井銀行の シンボルマーク決まる

四階建て、延べ二万八千方呎・東灘区本山南町を建設することを発表した。

来年四月一日に発足する太陽神戸三井銀行のシンボルマーク、コーポレートカラーが決定した。

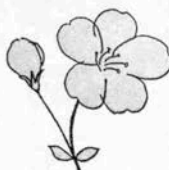
同社がかねてより設立計画を進めてきた「関西システムセンター」「東芝関西研究所」を収容し、総工費約百億円で両部門合わせて約千人が勤務する予定。

日本を代表する桜の花をマークに採用、ユニバーサルバンクとして新時代に向

各フロアを結ぶLAN

（ローカルエリアネットワ
ーク）、本社・支社・各研
究所など全国の拠点を東芝

完成予想パース



シンボルマーク

け国際的な飛躍を目指す新銀行の姿を表現している。また、斬新性を追求するために銀行のマークとしては珍しい写実的なマークとなっている。

コーポレートカラーも、

心をつなぐあたたかさをもち、しかも人をなごませる色という理由から、マークと同様、桜色を採用した。★スイス菓子「ハイジ」がブティックをオープン

商品は前田社長自身がデザイン、セントバーナード犬のキャラクターが特色でジーンズやトレナーなど約十種類のアイテムを取り揃えている。同社の洋菓子部門以外への進出は初めて。★テクノオーシャン'90 神戸で再び開催



前田昌宏社長

★KOBEOフィスレディ★

古塚比呂子さん（24）
〈近藤忠商事株式会社
販売事業部勤務〉



「好き嫌いがはっきりしていて、感情がすぐ表面に出るんです」と自己分析する彼女は、持ち前の明るさをいかし、商社の営業ウーマンとして忙しい毎日を送っている。休日はドライブに出かけることが多いそうで、レトロで止まることもしばしばというワーゲンと仲よくツーリング。「時間が許せば仕事の関係で興味を持ったベルギーに行ってみたいです」とにっこり。

芦屋市在住 いて座のO型

〃兵庫ルネッサンス〃

今、甦る歴史街道

兵庫スタイル復活宣言

□座談会出席者（敬称略・順不同）

伊賀 隆（神戸大学経営学部教授）

高田 静夫（兵庫津復権振興協議会会長）

名生 昭雄（郷土史研究家）

小原 弘子（神戸国際観光協会観光事業部）

中川 弘安（宝地院住職）

神戸のルーツである兵庫区と長田区南部地域のかつての賑わいを取りもどそうと、兵庫津・復権振興協議会が続ける運動の一環として、去る11月15日～20日まで、さう神戸店において「兵庫津文化展―福原西国三十六カ所と奥の院摩耶山天上寺の観音さま」が開催され、好評を博した。

神戸の近代化の原点であった兵庫。インナーシティ活性化が叫ばれる昨今、行政でもインナーシティプロジェクトの一つとして、兵庫の街の整備を挙げている。そこで、これまで育まれてきた兵庫の歴史性、文化性と未来が調和したインナーシティの形式が望まれ、21世紀へ向けて、次世代の要望に応えるため、今、兵庫では新しい街づくりが始まろうとしている。そこで、兵庫と関わり合いの深い方々にお集まりいただき、「歴史の街、兵庫のこ

れからの街づくり」をテーマにお話を伺った。

★歴史を踏まえた上での街づくりを

高田 昭和61年頃、まだ兵庫津・復権振興協議会ができる前に、兵庫に縁のある人達と酒を飲んでる時に「このままでは兵庫が死んでしまう」という話をしていたのがきっかけで、いろいろな人に意見を聞いたり、指導を受けたりしながら、やっと昭和62年の7月に協議会が発足。地域住民の意見を聞いて、それを行政に反映させていこうということで出発しました。

そこで、まず最初に考えたことは、道路を良くしようということ。つまり、歩ける道を作ろうということ。す。車の通る道はあるけれども、人が快適に歩ける道がないですね。で、その発想の原点は、中川さんが見せて下さった昔の三十三カ所巡りの古い本だったんですよ。そこにはね「寺と寺を結ぶには、道をつくり、橋を架け、井戸を掘り、寺は病人を見よ」と書いてあった。これは、私達が活動している思想と、これからの兵庫が、この一文にあるんじゃないかと中川さんと相談して、三十三カ所巡りを復活させようということになりました。で、今回の文化展開催の運びとなったんです。

中川 開発が進んで神戸は立派な街になりましたが、反面、失なったものも少なくないですね。例えば、高速道路の開通で、兵庫の街が南北に分断されてしまった。そのために、一つの町内に隔たりができて、付き合いす



中川 弘安 さん



小原 弘子 さん



名生 昭雄 さん



高田 静夫 さん



伊賀 隆 さん

できなくなりましたねえ。東西に長く、南北に短い街を分断された被害は大きかった。

高田 そうですね。しかし、できあがってしまいましたから、これからは、その南北問題にしても解決していかなくてはなりません。その上で、道路の見直しは重要な課題ではないでしょうか。

名生 昔の西国街道は、京都から九州方面へたどる道ですが、その道が元町通りから兵庫の東の入口である湊口惣門（湊八幡神社前）をくぐりぬけて兵庫の街へ入ってくるんです。そこから札幌の辻というところでL字型に曲がり、そして、蛭子神社の前を通って、柳原惣門から長田、千守川の方へと続いていくんですね。かつては、それをメインストリートとして兵庫の街が形成されていたんです。

先程、高速道路の話がでしたが、それ以前に、実はJRの高架問題があるんですね。高架で神戸市内が南北に分断されましたが、兵庫は幸いなことに、昔の兵庫外郭の土手に位置するところに建設されたので、街の真中を分断せずに済んだんですよ。外側を掠める程度で終わったわけです。ところが、高速道路は、そうはいかなかった。高架の場合には市の東部、三宮界限では当時、猛反対がありました。でもね、良い部分もあったんです。というのは、水を若干弱めることができたり、高架下の繁栄をもたらしたということもある。逆に言うと、高速道路問題では「災い転じて福となす」ような活用の仕方もあるんじゃないですか。それが、高田さんが口火を切った活動することと結び付いてくるんですね。

歴史的にも重要な地区ですし、「兵庫津」という響きにも興味を得て、この協議会にのめりこんでしまいいました。（笑）

小原 昔、兵庫がそんなに繁栄していたということを今まで認識していませんでしたので、この座談会を機会にもっと知りたいと思います。

たくさんさんの史跡が残っていて、素晴らしい街だなと思います。ただ、女性が一人歩きでにくい部分がありますね。あまり案内板もありませんしね。これから道も整備していかれるということで、同じモチーフを使って、イメージの統一された街づくりをすれば、女性の方々もたくさん来られると思います。折角、これだけの史跡とか文化財があるのですから、もっと活用してもらいたいです。

中川 なんとか、北野の異人館ブームのように、ギャルにもてる街になればなあ。(笑)

高田 神戸の超大重工業時代の終わりが、兵庫のつぶれた大きな原因であることは明確です。その産業に支配された地域でしたからね。私の子供時代は、夕方になると新開地には、何万という職工がアリのように道を通っていましたよ。

中川 新開地から東山、菊水小学校の前を通りぬけていく道は、雪駄を履いた職工であふれていましたものね。みんな歩いて帰っていたんですよ。

労働者と雇用者が一緒になって「労使クラブ」というのを開いていてね。10銭で腹いっぱい飯が食えた。そういう点でも神戸はハイカラな街だったなあ。服装の面だけではなくて、労働運動や民衆運動も進んでいましたよ。

名生 そうですね。大正政変のような政治に関する事でも、米騒動にしてもそうですが、それ以外のことも、非常に早い時点で神戸の民衆は立ち上がっていますね。活気があったということかな。

中川 そう、そう、ものすごく活気があったな。

高田 その後、戦災で街が焼けて、軍需産業が衰退して同時に、西神団地のような無煙炭時代が幕明けするのですが、兵庫の南部は不幸にも殆ど焼けてしまったんですよ。だから発展しない。それが、インナーシティ問題がおこりかけた原因ですよ。またその問題に気付くのが遅かったし、解決には膨大な投資が必要になってきます

よ。運河だけでも生活していた人が、たくさんいました。今は材木の置き場ではないのが事実です。港の変遷もあって、どんどん街が寂れてしまった。

小原 今の良さを活かして、日本らしい下町情緒を残した街にしたいだと思いますね。例えば、ヨーロッパの街は、まわりとの調和を考えて統一された感じの街づくりをしていますよね。

名生 歴史を踏まえた上での街づくりができていますよね。

小原 そうですね。そのような場所では、キラキラしたネオンサインや看板はあまりありませんね。新しく街が整備されるのでしたら、ネオンサインのないように努力するとか、広告もあちこちにベタベタ貼るのではなくて、地下鉄等の構内の壁や地面を利用するとか、景観を害するような広告はない方がいいと思いますね。そして、建物も機能性がかりを優先させた、画一的で殺風景なビルはあまり好きではないですね。

高田 結局、兵庫は三宮と同じ街づくりをしては駄目なんですよね。兵庫は兵庫津の特色を活かしたものに。例えば、北野町の景観保全条例で、町全体が保護されたね。それに習って、兵庫景観保全条例を提案したいと思います。商業地域、工業地域、住宅地域等に分けた用途別地域を設けたりね。

伊賀 兵庫突堤や運河、それに会下山など、兵庫にはフロンティアが多い。現在、三宮には商業機能が集中していますから、兵庫には、そんな土地を活かした独自のスタイルを望みたいですね。

高田 新市長(笹山現市長)に期待したいところです。

★関西のルーツは神戸、その中心は兵庫だった

高田 兵庫津文化展のテーマカットを市長(宮崎前市長)にお願いしてきたんですが、その際に、次の活動のテーマを決めました。それは、「兵庫ルネッサンスー光と緑と遊び」。これをテーマに兵庫の掘とおこしをして

いこう、住民運動をしていこうと、今日決めてきました。ですから、まだどこにも発表していないんですよ。

——（拍手）

高田 “ルネッサンス” というのは、過去の復興をして、もう一度輝やかしい歴史をつくらうということなんです。そして、緑と光と遊びを。まず、神戸は緑が特徴ですから、森のような街に。“遊び”の意味で兵庫にいいグルメをもってくる。それから、街に光を与える。太陽の光だけではなく、小原さんがおっしゃったように、人が安心して歩ける道をつくらないかね。きれいな道であると同時に、歴史の道ですから、何となく風雅な、文化が楽しめるような道だね。

中川 そう、もつと明るくしないと。安心して歩ける道は、本当に少ないのが現状ですよ。

名生 今のたたずまいを活かしながら、歴史の街を復活させることは可能なんです。例えば、壁に古の写真やパネルにして貼って、見ながら歩けるようにしたり、ちよつとした工夫で楽しくなる街づくりができると思うんです。

伊賀 非常に夢の多い場所だと思います。須磨のような場所は、観光資本に目をつけられますが、兵庫は、そうではありませんから、住民のアイデアで個性ある街づくりができるのではないのでしょうか。神戸発祥の雰囲気を残しているのは何と言っても兵庫だけです。三宮には残っていないものがありますよ。

高田 三宮に無いものがたくさんありますよね。運河にしてもそうです。近代的に活かそうとするなら、ヨットハーバーを誘致したりできますよ。これは、先程の“遊び”の要素の一つとしてね。

それから、いわゆる“へそ”がないですよ。中心地が。例えば、神戸から消えてしまった寄席をつくったりすれば、若者からお年寄まで集えると思うんです。

名生 なるほど。寄席会館をつくったりね。

高田 幅広く活用できる施設だね。

名生 小原さんは、ヨーロッパの街並で、どこが一番印象深いですか。

小原 そうですねえ……どの街も良かったんですけど、イタリアのフィレンツェの街などは、街全体が美術館のような感じで、建物一つ一つが芸術的で、歩いているだけで楽しいですね。それから運河の街、ベネチアが特徴的で、車が通らないことがどれほど歩きやすいことが良く分りました。水上タクシーが主流で……。

名生 上手いですよ……。

私は、日本の中の、全国的な兵庫を復活させたいです。大政奉還に次いで王政復古が行われ、江戸幕府が崩壊した時には京都が首都で、その窓口として兵庫港が開港した。関西のルーツは神戸、そして、その中心は兵庫なんです。しかも、よく神戸100年と言いますが、兵庫は平清盛以前の古い歴史があることを絶対に忘れないでほしい！。

中川 そのためにも、いろんな所を実際に歩いて歴史の勉強をする必要がある。まず、兵庫の住民から。

高田 先程のヨーロッパの話でね、民家をはじめ石造りの建築物がヨーロッパには多く、大寺院もたくさん現存していますね。それがヨーロッパの伝統的な慣習です。一方、日本は木造り。ところが最近、残念なことにお寺が復活する時、鉄筋コンクリートにするお寺が多い。

中川 あれは、良くないですねえ。見ていて思います。小原 防災のためにされているのかもしれませんが、できるなら木で復活していただきたいですね。

高田 表側だけでも木を感じられる、和式風の建物をね。

名生 一つの色調をもった、兵庫らしさの街づくりだね。昔のアイデアを活かさないといけない。

小原 そうですね。日本人ですから日本式で勝負するのがいいと思います。他の国の真似をしても、結局、真似でしかないんですよ。それに、日本の風土に外国の様式をもってきて、湿度も違うし、景観上も合いません。

んよね。

中川 湿度の問題でね、余談ですけど、ハワイの日系人が日本へ来て仏壇をよく買って帰るそうです。ところが、帰るとバラバラになってしまう。乾燥して膠がはげてしまうんですよ。風土の違いを忘れてはいけません。

★兵庫にまつりの復活を

名生 歴史教育博物館に欲しい資料が、兵庫にはたくさん残っていますね。例えば、兵庫の政治、経済の歴史を記した岡方文書が岡方会館に残っています。それは、調査、未調査の分がありますが、市教育委員会が分冊で本にまとめているところです。

一方で、神戸市制100年にわたる市の膨大な量の公文書が文書館（もとの南蛮美術館）にあります。ところが、狭くて保存できなくなってきたんです。新たに、文書を保存し、市民に公開できる機能が必要になっていく。そこで、日本の歴史の中での兵庫、あるいは神戸の新しい近代神戸、それぞれの公文書の保存と展示ができる博物館が欲しい。ここでは、学術講演ができるような講堂を作ったりしてね。

伊賀 娯楽的な設備は、民間にまかせて、公共的な設備を作るのなら、そういった歴史博物館や美術館、研究室等の、自分を高めるような機能を配置すれば、街全体も変化してくるし、兵庫のカラーができていいと思います。

小原 ぜひとも、つくっていただきたいですね。

高田 そのためには住人みんなが、その気持ちにならないとね。

伊賀 遠い将来になるかもしれませんが、兵庫南部（兵庫貨物駅跡地、南部臨海地帯）で、例えば、“神戸博覧会”などと銘打って、イベントができればね、道路の整備も兼ねて。

小原 神戸国際観光協会では、神戸観光のPRをしたり

イベントを通して地域の活性化を計る活動などを行っています。私は兵庫では、一つの案として、懐古行列をしたり、同時に琵琶を演奏したり、平家物語を朗読したり、知識人に講演してもらったりする大きなイベントを神戸まつりにからめたりしてはどうかと思うんです。

高田 かつて神戸には、時代行列があったんですよ。それをフラワーロードではなくて、兵庫でできればね。

ただ、兵庫にも“清盛まつり”という祭が一つだけあるんですよ。

名生 清盛塚で行われていますね。

高田 ところが、だれも知らない。

中川 神戸まつりの前々日ですよ。

私は子供の時に神戸まつりでは、“べ神戸港は、まからまちへーヨイヤサ”と唄ったもんです。あれは、昭和になってからのもので、港は何といっても兵庫が原点なんです。

高田 そんな頃のまつりを再現して、復活させないと。そういったことでも、誰か言い出したからというのではなく、住民の意志で住民が運動するようにね。

名生 そして住民が参加できるように、“平家物語”など古典に根ざした長唄、琵琶に、踊り、それに“遠矢”に因んだ矢の競技などいろんな遊芸が復活すればおもしろいですよ。それに兵庫大仏も復活しますし…。

小原 自分の住んでいるところに誇りをもって、その歴史を学ぶために、婦人会や自治会で勉強会を開いてみるのもどうかと思います。そして、ボランティアで、観光客を案内したりすれば、地域ぐるみの街づくりとして進行できると思います。

伊賀 人間にやわらかい街、やさしい街づくりを望みますね。

高田 次のテーマ“兵庫ルネッサンス—光と緑と遊び”をもとに、兵庫の人たちが立ちあがってほしいです。

（11月9日、東栄弥にて収録）

田崎真珠株式会社

取締役社長 田崎 俊作
神戸市中央区港島中町 6-3-2
TEL (078) 302-3321

オールスタイル株式会社

取締役会長 川上 勉
神戸市中央区港島中町 6丁目 5-1
TEL (078) 303-3311



キャンペーン「神戸の観光と魅力を探る」の
企画は以上各社の提供によるものです。